



小濱常務理事逝去

住宅生産振興財団常務理事小濱久八氏は、昭和56年5月31日、逝去された。

故小濱常務は、当財団の前身である「全国住宅生産推進協議会」の結成に全力を投入、引続きその公益法人化に尽力し、現在の住宅生産振興財団誕生の推進者であった。

故小濱常務の発想になる財団住宅祭がようやく軌道に乗り、大いなる躍進の時を迎えんとする時、卒然として世を去った故人の痛恨察して余りあるものがある。

故人の眞福を祈り、故人と公私ともに親交の厚かった救仁郷斉氏の追悼の辞を捧げる。

小濱久八君を悼む

救仁郷 斉

小濱君が逝ってちょうど一月たった。いまでも、電話のベルが鳴り、受話機から小濱君のなつかしい声が聞えてくるのではないかというような錯覚をフト感ずることがある。

小濱君との出会いは旧制七高からである。当時は終戦前のゴタゴタした時期であり、彼は文科、私は理科、彼は思索型で私は運動型ということであまり深い付き合いはなかった。大学に入ってから、たまたま郷里鹿児島県の学生寮で同じ釜のメシを食い、交友が始まった。

社会人になってから、彼は電通、私は役人となり、しばらく深い交友もとどえたが、十数年前から彼が非常に骨折ってまとめてくれた高校の同期クラス会から再び緊密になった。その後、彼は電通マンとして住宅産業に関係するようになり、一週間に一回は電話をかけ、二週間に一回は顔を合わせ、一月に一回はシヨウチュウを飲むといったつき合いが十年以上も続いて来た。

彼は非常に世話好きで、高校のクラス会をはじめ、いろいろな仲間の会の幹事役を引き受け面倒な仕事をいやがらずに骨身惜しまずやってくれた。そういったことから交友関係も広く、私も彼の紹介でいろんな人と付き合うことができた。

一方、彼は顔に似あわずロマンチストで、アイデアマンであった。そういった性格の間は実行力や粘りがないのが普通だが、彼は違っていた。私のところにいるんな企画を持ちこんでは意見を求め、私がちよつと意見を述べると次の日にすぐ修正して持ってくるという仕事ぶりには頭が下がった。

こういった企画力と行動力で彼はいろいろのプロジェクトを成功させたが、彼の最後の仕事であり、かつ、彼が生涯の中で最も情熱を傾けたのは「住宅生産振興財団」であったろう。

私も虫のしらせか、彼の亡くなる二日前に病床を見舞ったが、その時彼が話したのは最初から最後まで財団の話であった。

今や彼は亡くなったが、彼の仕事は残っている。彼の残した仕事が発展して行けば、彼は草葉の蔭で満足するのではないだろうか。また、それが残された私達ができる最大の供養となるろう。

小濱君よ、やすらかに眠りたまえ。

(日本住宅公団理事)